

## 豊かになったらもうやらない…実感した廃棄物ビジネス～株式会社エコロ (中)

[https://www.iru-miru.com/article\\_detail.php?id=40151](https://www.iru-miru.com/article_detail.php?id=40151)

からの続き。エコロ代表取締役の後藤雅晴氏は、現在51才。同氏のこれまでの経歴を伺うと、自動車整備工、廃棄物運搬ドライバー、はたまたアパレル営業などもしていたという。そんな氏が、本格的に廃棄物業界に入ったのは、32才の頃。

ある廃棄物処理大手企業からヘッドハントされ東京都産廃協会青年部（現：東京都産業資源循環協会）とともに、廃棄物処理・リサイクルに関する教育研修やコンサルティングを行う「エコスタッフ」に参画。



東京都環境整備公社（現：東京都環境公社）」と共同事業エコスタッフでは、廃棄物処理の適正化・マテリアル・サーマルリサイクルの提案する業務に勤しんだ。約3年間、城南島エコプラント事業を担当したという。

### 東京スーパーエコタウン構築に従事

ちょうど当時は、同公社により都有地の大田区城南島（城南島エコプラント）や中央防波堤埋立跡地で、首都圏の廃棄物問題解決、循環型社会の推進を目的とした「東京スーパーエコタウン」が稼働を開始した頃だ。

<http://www.ecotown-tokyo.jp/>

「城南島エコプラントは、東京都の超大型破碎・減容施設で、最終処分場の延命化を目的に、主に中小企業からの排出廃棄物を扱っていました。2011年3月、廃プラの埋立て禁止を受け事業は終了しましたが、現在は産廃の適正処理、リサイクル推進の検証をする事業を運営しています」（後藤社長）

「私が城南島の事業を見ていて思ったのは、産廃はとにかく「破碎したら埋立てる」という現状で、これはいずれ寿命が来る、だからできるだけ資源物は取出して減容しなければ、ということでした」（同氏）



埋立処分場で行列をつくる清掃車（写真：東京都清掃事業百年史）

当時は、東京ごみ戦争の記憶も生々しかった。高度経済成長期、ごみが大量に発生したものの、東京の各市区町村では、どこも最終処分場はおろか、清掃工場の建設にさえ、住民から反対運動が起こった。そのため、東京の埋立ては、夢の島の例を挙げるまでもなく、海へ、海へと広がったのだった。現在は、清掃工場は各地区にあるが、臨海の中央防波堤では

相変わらず埋立てが行われている。（写真：東京二十三区清掃一部事務組合HPより）

<https://www.union.tokyo23-seisou.lg.jp/shiro/nakattara/03.html>

東京環境整備公社での事業を卒業した後、後藤氏は、主に廃棄物処理のコンサルティングや人材派遣を行う会社「Sリサイクル」を起こす。

「廃棄物のリサイクルを行うに当たっては、まずなにを扱うのか、そしてどんな装置を使うのか、そして人的リソースをどうするのか、この3点が大事です。そして次に重要なのが「出口戦略」です。これが揃わないとプランニングはできない」（同氏）



後藤氏は、その後、プラスチック資源リサイクル企業「エコロ」を起こすが、ここではきちりと、そして周到に前記の事業プランニングを行なっている。前回にも書いたが、同社が扱うのはリサイクルしやすく資源需要も高い硬質プラスチック、また省人化が可能で高度な破碎・分別の行える装置（プラント）を整備、さらに確固とした需要家、すなわち出口。このスキームが、確保されているからこそ、エコロの事業は安定、さらには拡大しているのだ。（写真：エコロ構内の高度プラスチック・リサイクルプラント）

「この世界は離職率が高い。だから人材派遣業を行なっていました。事業的にはうまく行っていました。環境も改善され、だんだん事業者様が直接雇用するようになってきましたね」（同氏）

### 資源ではないと知りつつ買わせる、これは一過性のビジネスだ

話を少々戻そう。後藤氏はSリサイクルの事業を行うのと同時に、プラスチックリサイクルの事業も行っていた。主廃プラを、海外、特に中国に輸出していた。また、同時に中国国内にもリサイクル拠点を構えていた。取扱いは、月に優に1,000トンであったという。しかし、数々の疑問にも突き当たった。

「ボール状の荷姿のプラが、例えば5個あったとする。そのうちひとつは、どう見ても資源物ではない。これはおかしくないか？そう尋ねると、いや日本では再利用はできないけど中国ならできる、と回答するのです。あきらかに廃棄物なのに、有価で買ってもらっている。中国はどんどん発展している、ゆえに人件費も上昇するのは火を見るよりも明らか。このビジネスは、一過性のものなのだと感じました」（同氏）

実際、中国でプラスチックリサイクルを行っていた仲間たちは、どんどん撤退していったという。

結局「豊かになったら、もうやらない」、というのが廃棄物ビジネスなのだということを、後藤氏は身を持って体験したのだ。そうしたことから、同氏は5年前にプラスチック資源の輸出、再生事業を撤収、国内循環に重きを置くビジネスモデルに切り替えたのだ。  
(続く)

(IRuniverse kaneshige)